

よりよく生きる

今回は、「おばあちゃんの赤い傘」という中学1年生のエピソードを紹介します。

「おばあちゃんの赤い傘」

中学1年生の翔太は、雨の日が嫌いだった。学校へ行く道はぬかるみ、靴はびしょびしょになる。そんなある雨の日、翔太は駅前で一人のおばあちゃんを見かけた。おばあちゃんは古い赤い傘を持っていたが、強い風で傘が壊れてしまい、困っていた。翔太は急いでいたが、少し立ち止まり、「この傘と一緒に入りませんか」と声を掛けた。

「ありがとう。でも学校は大丈夫かい？」

「少しくらい遅れても平気です。」

翔太はおばあちゃんを家まで送り届けた。家に着くと、おばあちゃんは何度も頭を下げながら、「人に親切にしてもらおうと、心まで温かくなるね」と笑顔で言った。その日、翔太は学校に少し遅れてしまった。先生に理由を話すと、先生は何も怒らず、「時間は取り戻せる。でも、人を思いやる心は、お金では買えない宝物だよ」と話してくれた。

数日後、翔太のお母さんが体調を崩し、病院へ向かう途中で財布を落としてしまった。困っていると、一人の女性が財布を届けてくれた。

「駅前で親切にしてもらった方のお孫さんですよ。おばあちゃんから話を聞いていました。あのときの優しさが、とても嬉しかったので、お役に立ててよかったです。」

翔太は驚いた。自分が何気なくした親切が、めぐりめぐって家族を助けてくれたのだ。家に帰ると、おばあちゃんから手紙が届いていた。

「優しさは、雨のしずくのように広がります。一人の思いやりは、いつか誰かの笑顔になって返ってきます。本当にありがとう。」

翔太はその手紙を大切に机の引き出しへしまった。

それ以来、翔太は「親切は特別なことではなく、自分にできる小さな行動から始まる」と考えるようになった。そして、困っている人を見掛けると、勇気を出して声を掛けるようになった。

人は一人では生きていけない。誰かの優しさに支えられ、また自分の優しさが誰かを支えている。そんな小さな思いやりの積み重ねが、温かい社会をつくっていくのだ。

「やさしさは、雨のしずくのように広がります」という言葉に、私は心を奪われました。誰かの小さな思いやり行動が、その周りの環境を温かくし、優しさの輪がどんどん広がっていく……。すばらしい社会の実現は、誰かの小さな一歩からスタートしていくのだと感じます。とても感動するエピソードでしたが、ぜひ、御家庭でも自分や他人の優しさが、社会をどのように変えていくかについて話し合っていると幸いです。

